

トルコからのたより

①

井上英二

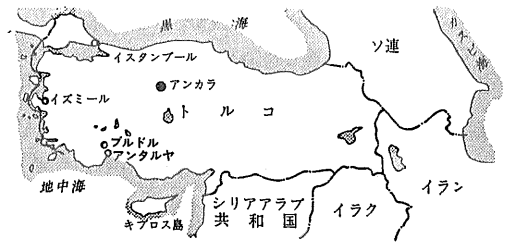
地質調査所石炭課井上英二技官は去る7月9日 日本を発ち1年の予定で M. T. A. (トルコ政府鉱物資源開発研究所) において技術協力を行なっている 現地からはすでに数通の便りが届いており それらには今まで比較的知られていないトルコの社会と自然のふんいきや地質のことなどにふれているので 同技官の了解をえてその1部をここに紹介することにした。

(石炭課 徳永)

第1信 アンカラにつく

7月12日無事アンカラに到着しましたが 空港には大使館員の方々や先発の秋月氏が迎えにきて下さいました 悪戦苦闘とんだネギカモとなったカイロ ベイルートでの数日の生活に比べ アンカラは故郷のように感じます それというのも街路がまことに美しく プラタナスの並木がつづき ちょうど札幌を思わせる様子 その印象が東洋的でもいうのでしょうか 心に安らぎを感じさせます。 まず秋月氏の泊っておられるホテルにおちつきましたがここは1泊30トルコリラ(1200円) いわば浅草的下町の繁華街の真中にあります 在留日本人の多くは山手の見晴しのよい住宅街にすんでいるとのことでした。

早速大衆食堂(シブヤ食堂のような所をご想像下さい)で食事をしていますが内容はたしかに栄養があります。 先便でカイロの異臭のことをかきましたが これは正しく名だたる羊肉のシシカプルー(焼肉)の臭いだわかりました。



位置図

M. T. A.

目指す M. T. A. (鉱物資源開発研究所)には昨日大使館の方につきそわれて初めて訪問しました。 所長アルバン博士不在につき 副所長エーゲット氏に挨拶 正式の契約書にこちらだけのサインをしましたが 先方はきわめて好意的でした。 私は鉱床部の石炭課(Lignite Section)に配属され とりあえずアンカラ県の第三紀の褐炭調査に従事ということになりそうです。

課長は精悍そのもののエネルギーなトルコ人 トウミュール(Tumür)博士で 課員は30名 今その大部分はフィールドに出ているそうです。 フィールドの期間といえば驚ろくなかれ5~6カ月間 これには少々がっかりしました 所内で英語が話せる人は 5~6人に1人 ドイツ語が2~3人に1人位 フランス語は5人中4人まで O. K. という有様です。 したがって私の面倒は英語の話せるヴェディング(Wedding)博士というドイツ人がみてくれることになりました。 M.T.A. は目下近代的なビルを建築中で 来年7月に移転の予定です。 標本の1部はすでに移転を開始していますが 現在の状態は地質調査所の溝ノロ+河田町÷2 といった感じで きれいとはいえません。 1室には2名づつ位入っていますが 私は出張中の誰かの席をとりあえずあてがわれました。

この M. T. A. に通うには当所の7台のバスが運行さ



アンカラ：城壁から見た新市街ウルス(ULUS)とアンカラ高原



城壁と旧市街(アンカラ)城壁はローマ時代に建てられたが以後セルジウクトルコに占拠された 石垣は安山岩質凝灰岩と玢岩 城壁内の旧市街は比較的貧しい人が多い

れています。9時出勤し12時まで仕事 12時から14時まで2時間はひる休み この時もまたバスが出て皆自宅へかえります 午後は14時から17時半まで勤務 17時25分になりますと 部長・課長をはじめ小使さんに至るまで一斉にかえります はっきりしていますね 目下部屋は冷房なし 扇風機なしで暑いこと暑いこと。

(7月14日 アンカラ M.T.A. にて)

第2信 出張準備

当地アンカラにきて早や半月となり 生活にも少し馴れてきました 前回にご紹介したヴェディング博士と共にトルコ南西部の第三紀鮮新世褐炭田の調査に行く予定ですが ジープやトラックの準備のためまだ確定的ではありません。私のいる M.T.A. というのは予想以上大きいことがわかってきました 所員は 全員1000人位のうち専門家は500人位 運転手も30人位います。作業の基本となる地形図には $1/10$ 万と $1/2.5$ 万があり 地質図幅としては $1/50$ 万と $1/10$ 万がありなかなか整ってこの地域の国としては予想以上組織だった研究所です。

研究所から一步外へ出た社会では ことばの通じないのは驚ろくばかりで 考えてみますとよくまあ図々しくたった1人で毎日生活しているものだと われながらあきれています。大きさにいえばアンカラ市内では トルコ人10人中外国語のわかるのは2~3人位 それもドイツ語やフランス語で 英語は比較的若い世代に通じるといっても全く貧弱なものです。そんなわけですから出張前のいろいろなむずかしいことは 全部私の部屋のアタック(Mr. Atak) 氏という好漢と 美人マダムの大ロー夫人がやってくれ本当に親切なのありがたさが身に浸みます。

トルコでの地質屋の出張準備についておしらせしましょう。出張に当っては M.T.A. が作業用衣服・靴・帽子などすべて支給してくれる立前らしく いくら私が作業用のものを日本から持ってきたと云って実物を見せて

も納得してくれませんがそれで今日庶務の人といっしょにアンカラの町へ作業衣を買いに出かけました。

その人は全然英語ダメ 店の人ももちろんできませんので Shopping がどんなものであったか想像ささいとにかくダブダブのシャツ2着と背広のズボン2着を買いました。こうした衣服よりもフィールド用としては安価な木綿の方がよいわけですが たまたま店にいた団令子ばりの娘が通訳してくれ 「M.T.A. で働いているならば当然背広だろう」というばかりでとうとう買わされてしまったわけです。

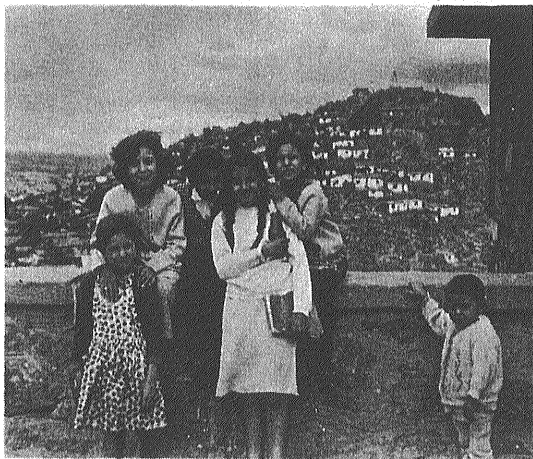
おかげで背広で山歩きということになりそうですが登山靴の代りに皮靴 その他帽子など合計日本円にして1~2万円の買物 しかも全部 M.T.A. 持ちです。こうして所員はフィールドの季節ごとに作業服の支給があるそうです。またこれと共にベット フトン シーツ 食器など買こみ フィールドに向うことになりました。

気 候

あわただしくすごしているアンカラの日々 ここも今は夏です 暑い日中は32~34℃ 時に40℃近くになると思われます(アンカラは北緯40℃ ちょうど盛岡位に当る)夜8時頃頃大部涼しくなったと思って寒暖計をみると31℃ しかし不思議にも汗はかかず 一寸でも風があるととても涼しく感じます 昨日は珍らしく曇天でしたが爽かで秋の北海道そのもの アンカラはまた札幌と似てとにかくプラタナスの多い街です。

食 事

研究所にかよう毎日では食事のことも生活の一部として無視できないものです。トルコの食事は油ツコイといわれ 着いて1カ月位は下痢をすとおどかされてきましたが 別にそれ程油っこいとも思われず幸 食欲は旺盛です。ちなみに朝食はビレキ(パンとパイの中間)とレモン水とアイラン(ヨーグルト)またはミルクで 日



城壁(ヒサル)内にすむ子供達(アンカラ)



ローマ時代浴場跡 AD3世紀のもの 遠景にアタチュルクの廟がみえる(アンカラ)

本円にして60~80円 昼食は M.T.A. の食堂で 2~3品(80円)これは毎日献食がかわるので楽しみです。夕食は下の上か 中級のレストランでオムレツやシシカパブー トマトサラダなど(400円以下)ですませます トルコ人は意外に少食のようで ヤセの大喰の私程品数を揃える人は少ないように見受けました。

とくにここに来て感じたことは 今果物がおいしく豊富で 桃・西瓜・メロン(日本のとは少しちがう)・ブドー・西洋梨・リンゴなど出回りメロンはとくに豊富です。

コーヒーといえば ほとんどの場合有名なトルココーヒーで しかもほんの一口のカップの中にコールドタールのように底¹/₃にとりとしたカスが入っています。

とくにスペシャルコーヒーといえバネスカフェを出してきます。 M.T.A. でも日に5~6度も各室をまわって茶をうりに来ます 紅茶・コーヒー 時にはジュースと気のむいたとき のみながら同僚としゃべるわけですが その人々をご紹介します。

同 僚

所員の大半はもちろんトルコ人ですが ドイツ人の地質屋がかなりいますし 階級差ははっきりしているようです。

私の机の前のマダムは地質図のコピーをしたり 色をぬったりしておりますが 聞けば イスタンブール大学の地質学科を卒業したとのこと アタック氏はイスタンブール工科大学卒 20才台のナコマン博士はフランスの大学出身の花粉学者 前の室のヴァイスキルハー(Weiskirher)氏は2年前ドイツからきた人ヴェディング博士はやはり1年々々と契約ごとにたのまれて もう13年もトルコにいとくかいうことです。 とにかく新興の意気大いにあがるといった青年期のふんいきがあります ちょうど今仕事の花が開きつつあるといった感じでよい折りにきたものだと思います。

(7月26日 アンカラにて)

第3信 ブルドル行

8月2日アンカラを發ち 同市西南方490kmにあるブルドル(Burdur)という町に滞在し 以降第三紀鮮新世の褐炭調査を1万分の1の地形図で行なっています。

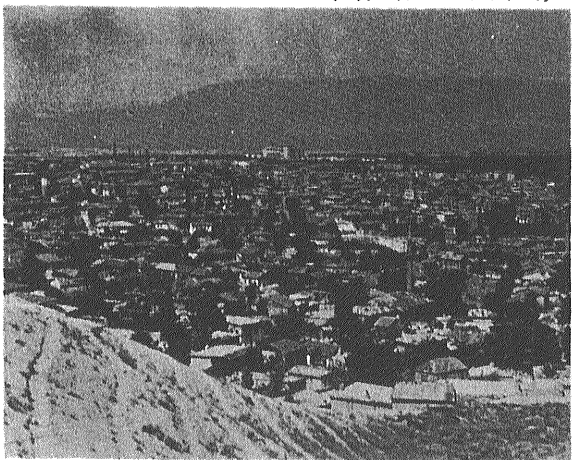
この町はブルドル湖のほとり海拔900mの所にあり 白樺やプラタナスの茂る静かできれいな所です 地中海から120kmばかり内陸に入ったところで ここにきたのは前述のヴェディング博士(57才) 私とトルコ人の運転手の3名のパーティーでした 出張にさいしては1人の調査でもかならずジープと 運転手1名が組みとなることが定っています。 ここへくるまで東京-大阪間位を7時間かかりました 道はよかったです 広漠としたハゲ山・高原の連続で最初はその雄大さに打たれましたが2時間もしてすっかりウンザリしてしまいました。

このブルドルではアパートを借り 3人各自自炊となりました かねて携えてきたベット・椅子・机などを持ちこみヴェディング博士はドイツ 私は日本 運転手はトルコと3人3様の料理を作ります。 M.T.A. の石炭課ではテント生活をするはずはないそうです こうしてジープを持参すれば町へ泊れますから。

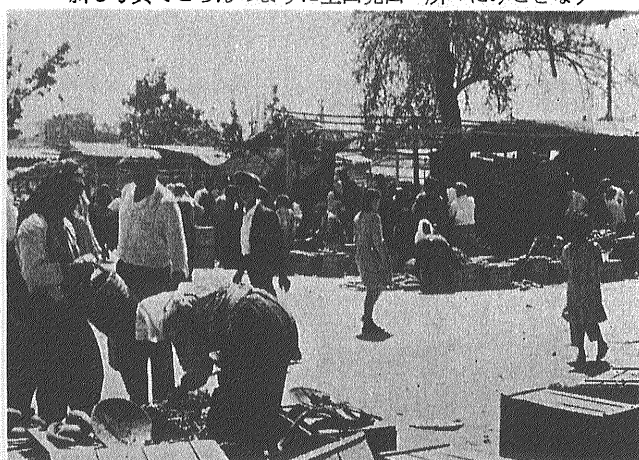
調査の第1日と2日目は役場や警察への挨拶と借家さがしに暮れてしまいます。 これはどこよらの国と似ていますね。 3日目になると 2万5千分の1と1万分の1地形図の使用許可を駐屯部隊の司令官のところへゆきます 地形図はトルコ国の秘密事項となっております わが国の戦時中と同じようにうっかり使うと手が後へまわることとなります。 地図に記入したルートマップはすべて調査後に M.T.A. に返さねばなりません これら地形図はすべて空中写真から図化したものです。

ブルドルの地質

ブルドル付近に分布する鮮新世の地層は 厚さ400~500mで白亜系の石灰岩を不整合におおって 10°位傾斜し写真でごらんのように全山秀山 所々にみごとなケ



ブルドルの街 人口約3万 県庁所在地 背後はブルドル湖



ブルドルの市場 毎週火曜日にひらかれ近郊から続々と農夫が果物や野菜をもちこむ

スタ地形を作っています。岩質がまた凝灰岩と凝灰質頁岩からできているときているので 日にてらされて白色に輝き 日中歩くのもつらい位です。水はおろか木陰1つなく 腰を下す所もカンカン照りの真中です。それで私たちは朝5時半起床 6時半出発 12時半調査終了借家にかえって食事作り 午後は整理・ヒル寝 夜は10~11時に寝るといふ毎日です。正味調査は6~7時間半 朝寝坊の私が5時半に眼覚めるのですから正におどろきです。全山総露出というこの地域では ゴマ化しは絶対ききません 沢をあるいても駄目 尾根 それも高い尾根をあるき時々腰を下して周囲を見回し岩相の変化をトレースし そのまま地質図をかくという方法が一番能率的とさとりました。したがってハンマーを振ることも少なく dip-strike も日に数度しかはからず 腰を下してはタバコをふかしスケッチし景色を眺め 行きから牧夫と山羊の群に変化を求めカメラに収めるといった日課です。こういったテキスト通りのフィールドが日本にあつたらさぞ学生の訓練用に好適でしょう。地層としては日本の岐阜県端浪の本郷層以上のものとよく似ていて わずかに緑がかった部分 赤みがかった層位炭酸カルシウムの沈積といわれるトラバーティン (trauevtine) などによって細分できます。

ヴェディング博士の地層分帯がよくわからないのでどこが境かとカミツイたところ 「近くで石を叩いても同質だからダメ できるだけ遠くからみなさい」といわれなるほどとなつとくさせられました。しかし分層の境界をはっきりさせるための尾根毎に $1/1000$ の柱状図を作りましたところ 鍵層の追跡や岩相の対比がわかってきますと 今度は博士が私に 「自分の地域でも柱状図を作るように」といわれるようになりました。しかし博士は非常に経験豊富 よい人と組んだものと思います。

ブルドルの石炭と岩質

ブルドル付近の炭層はその鮮新統の基底部にあります

厚さは1.5 m 3000~4000カロリーです 目下炭鉱は開発初期で 採炭夫4名 トロッコ押し2名というわけで 先日坑内をみてくれといわれ 坑内に入りましたところ炭層は断層に当たってみごとにチョン。忠告といつてもことばの関係で「ソーラヨク(右側ない)」「サーヴァル(左側ある)」たったそれだけ。とにかく簡単なものです。しかしトルコ全土の鮮新統には至るところ褐炭層が入っているようです 褐炭(lignite)といつても 日本の常磐の石炭などはこちら流にいえば lignite に入りませしカロリーも6000近くのもあります。

造山帯のせいでしょうか 鮮新統といえども岩質はかく九州の骨石層をご想像下されば当ります。

ブルドル湖は地図でみると小さいのですが きてみてその大きなのに驚ろき 早速日本の湖と比較しましたら ほぼ霞カ浦ほどあることがわかりました。博士に案内されてこの湖成堆積層を見ましたとき Mytilus (いがい)の幼貝化石が密集していましたので この湖は半かん半淡か とたずねましたところそんなことはないといわれ 自分で水をなめたら塩からかったので安心しました。湖の岸からはガスがブクブク出ているのを見て 日本ならばと思ったことでした。

このブルドルの町は古い所らしく山を歩いていて思いがけず 野原に古代ローマ時代の石灰岩の柱や彫像がころがっているのを見ることがあります。朝日に映えるこうした遺物をみると 思わず悠久の歴史の中に身をおいていることの感激をおぼえます またこれよりずっと古い BC 3000~5000年の土器もみつかるそうです。

ケスタの上のなだらかな牧草地や農地では 目下小麦の収穫期 男女が粗末な服をきて全く原始的な農耕を行なっています。カメラを向けますと男と子供(男に限る)はすぐにポーズをとりますが 女は一切駄目ヴェ博士の話によると 先年オランダの地質家がトルコ東部で女性を撮影して殺されたとか いかなる女性にたいしても十分心しておりますからご安心下さい とくにトルコ



ブルドル市街の後背地 鮮新統の山地 白色凝灰質頁岩と Travertine の互層 暗色部は頁岩 褐炭層はこの層の base にある

の女性は節操堅固です。ブルドルを去るというのでアパートのおっさんが私の両ほかにキスしてくれました。親愛の情だそうです。その娘さんはただ握手だけががてブルドルに別れをつげます。

(8月18日 ブルドルにて)

第4信 地 震

トルコの大地震についてお見舞ありがとうございます。存じました。このようにまだ生存していますからご安心下さい。今回の出張地と震源地は東と西の反対方向で。地震当日ラジオでいち早くキャッチしたヴェ博士が事件を教えてくださいました。最初死者74人ということでしたが、日が経つにつれ400人から2000人、さらに3000人ということで。その度ごとに「チョーク(非常に)テリブル」といいあったものでした。21日に地中海沿岸のアンタリア(トルコの名勝地)へ行った折も新聞にデカデカと地震の写真が出ていましたがトルコ語でサツパリわからず。先日自宅より新聞の切抜がとどきはじめて詳細を知ったわけです。そうとしたりいち早く情報を日本にうりこめばよかったのにとわれながらニュース感覚のなさをなげくばかりです。M.T.A.からも早速現地へ飛んだようです。それよりも昨29日同課のマダムから「東京付近で震度7の大地震があった」と知らされ早速ひる休みにK.L.M.の事務所につとめるロイ・ジェームス氏の弟君のところへ飛んでいったところ、彼から震源地が松代付近であると教えられ胸をなで下しました。

トルコの震源地である東部やイズミール・イスタンブール南方等は新期火山地帯で地震も多い所だそうです。トルコの住宅はレンガ造りなので恐ろしいです。ブルドルではアパートの1階をかりていましたが、次回からは最上階をかりることにしよう。

アンタリア

アンタリア 地中海沿岸の風景のよいその土地はむし



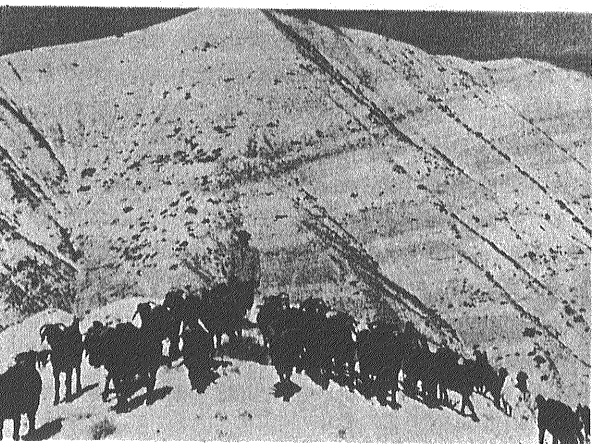
ブルドルにおける井上技官

暑く2カ月振りて故国日本を思い出しました。じっとしていても汗がふき出す程で、頭痛がして景色見物どころではありませんでした。それでも33℃というのですから、はるかに皆さんが暑さになやまされておられるのを思い出しました。このアンタリアでは、床屋の椅子やタイヤの広告など日本製品の名前を見るごとに感激しました。写真屋にゆけば日本のカメラをほめてくれますが、フィルムの高いこと、コダックカラー1本2400円、トルコフィルムモノクロでも400円はします。しかし全般的としてはドイツ製品が圧倒的に多いです。

今日はトルコ革命の父アタチュルク(ケマル・パシヤ)の祭日で休み。アンカラの市中も朝からトルコ国旗がにぎにぎしくかざられ、かがり火がたかれ、たいへんな人出です。

アタチュルクの肖像はM.T.A.もちろん市中至る所に飾られています。都会・田舎をふくめて約2カ月、どうやらトルコの空気にもなれてきました。トルコ人は正直、親切であるが、東洋人的感覚というにはそこにちょっと異質のものがあるような気がしてきています。それはデリカシーの問題であるかもしれませんが。(つづく)

(8月30日 アンカラにて)



ブルドルの山地の尾根 羊飼と山羊にあう



アンタリアの町 地中海沿岸にあり人口約6万 景色がよい 古代ローマの遺跡にとみ 手前の城壁もその1つ